

校内研修

1 研究主題について

(1) 研究主題

すすんで伝え合い、共に学びを深める菊西っ子の育成

～「き・く・に・し」学習における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を通して～

(2) 研究主題設定の理由

① 学校教育の今日的課題から

今我々が生きる社会は、急速な変化の中にある。人工知能（A I）の進化などにより、これまで必須とされてきた知識や技能が、別の知識や技能にとって代わられてしまうことも少なくない。

次期学習指導要領改訂では、近未来の社会を次のように捉えて、そこで必要な教育の在り方を宣言している。

「予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を作り出していくことが重要である。これからの子どもたちには、社会の加速度的な変化の中でも、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚し、高い志と意欲を持って、蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる」

これらの資質や能力は、本校の指導過程である「き・く・に・し」学習において、ペア学習、グループ学習、全体討論等の学び合い学習や振り返りを通して高めてきた。

今年度は、学び合い学習を算数科の中でどのように取り入れ、主体的・対話的で深い学びにつなげていくかを研究し、課題への理解を深めていきたいと考える。

② 本校の教育目標から

本校の教育目標は、「ふるさとに誇りをもち、やさしくかしこくたくましい子どもを育成する」である。めざす児童像の知の側面では、「自ら何を学ぶかを見出し、学び方を身に付け、学んだことをどう自分や社会のために生かしていけるか考えることができる子ども」を設定している。この目標を達成するためには、他者との関わり合いの中で、主体的に伝え合うことを通して、互いの思いや考えを知り、認め合いながら、共に高まり合おうとする力をつけていくことが必要である。

③ 児童の実態から

これまでのテーマ研究を通して「き・く・に・し」学習については定着が進んでおり、児童は学習の流れに見通しを持ち、学習に参加できるようになっている。しかし、学び合いへの意欲は低く、展開「につめる」において、意見をつなげたり、ぶつけ合ったりするスキルが身についておらず、学び合いを通して、自分がわからないことを主体的に追求したり、友だちの考えを取り入れたり、友だちの考えのよい点に気付いて考えを修正したり、全体で練り上げて考えを深めたりすることや、自己の学習の深まりについて振り返ったりすることはまだ十分ではない。また、教師の意識調査

では、資料を読み取って考えを表現させたり、適切に評価して指導改善に役立てたりする等の評価が低く、学び合いに向けた授業改善が必要である。

2 研究主題の分析

- (1) 「すすんで伝え合い」とは
自分の考えを積極的に言葉で伝えたり、相手の考えや意見を受け入れたりして、自分のものにするものである。
- (2) 「共に学びを深める」とは
友だちとすすんで伝え合う中で、自分の考えを整理したり、修正したりしながら、一人一人が考えを深め、共に学ぶ楽しさを実感することである。
- (3) 副題との関連について

2 9 年度 きくにし学習の指導過程について

- ☒ きっちりつかもう・・・今日のめあてをつかもう
- ☒ ふうして見つけよう・・・工夫して自分(ペア・グループ)で考えよう
- ☒ つめよう・・・みんなで深め、まとめよう
- ☒ しっかり振り返ろう・・・今日の学習を振り返ろう

本研究では、教科を算数に絞り、研究に取り組む。

今年度は、算数科の教科の特性を生かすとともに、学び合いのためにしっかりと自分の考えを持たせたり、発達段階に応じて話し方聴き方を徹底したりして、対話を通して認め合わせ、「わかった。」「なるほど。」と理解できたことを実感させる。また、振り返りにおいては、自他のよさに気付き、自己の学習の深まりを振り返らせることを通して、理解の促進と自己肯定感、学習意欲の向上を図りたいと考える。

3 研究の具現化と構想

(1) 研究の仮説

- 〈仮説1〉 子どもの問いから課題を設定し、子どもが見通しを持って問題解決に取り組む、自分の学びを振り返る学習の仕方を身につけさせれば、主体的な学びにつながっていくだろう。
- 〈仮説2〉 子どもが課題について考え、相手意識を持って互いに考えを伝え合えば、対話的な学びにつながっていくだろう。
- 〈仮説3〉 お互いの考えを生かし、数学的な見方・考え方を働かせて、よりよい考えを作り上げる学習活動を行えば、深い学びにつながっていくだろう。

(2) 研究の視点と内容

① 仮説1に関する視点

視点ア 課題提示の工夫

実生活に関わることや既習内容を生かした問題から問いを持たせる。実物を提示したり、考えのもとになる数を整理し、焦点化したりすることで見通しを持たせる。

視点イ めあてとまとめの提示

提示した問題により、生まれた子どもの問いについて、思いついたことを話し合わせる中で、つぶやきや考えを拾いながら、子どもと一緒にめあてを作る。子どもの言葉を使って、めあてに対して何を学んだのかが分かるまとめを子どもと一緒に作る。必要な算数用語は確実に指導する。

視点ウ 振り返りの工夫

本時の学習を活かせる適用問題(基本問題、発展問題等)を解かせ、身につけるべき内容の定着を図る。終末では、板書やノートをもとに学習を振り返らせる。振り返りの仕方については、発達段階に合わせ、低学年は、分かったことや頑張ったこと(顔マークやひと言感想)、中学年は深まったこと(「わがとも」から1つ選ぶ等)、高学年は自分自身の学びや成長・変容を振り返ることができることを目標にする。振り返ったことは、次時の導入や課題等に活用する。

②仮説2・3に関する視点

視点ア 話し方・聞き方の工夫

相手意識を持った話し方・聞き方の徹底をする。

話し方名人

聞き方名人

① 聞く人の方に体を向けて

② 場面に合った声の大きさで

③ 考えを言ってから理由を

④ 相手の考えを取り入れたり比べたりして

⑤ 例を示して

① 事実、感想・意見の区別をしながら

② 話す人の意図をとらえて自分の考えと比べながら

③ 分からないところは質問を

(高学年用)

話し方の例

話し合うとき

【ちがう意見】

○○さんは・・・だと言いましたが、わたしは・・・です(だと思えます)。

【つけ加え】

○○さんの考えにつけ加えて、・・・です(だと思えます)。

【深まり】

○○さんの意見を聞いて、・・・だとわかりました。

【まとめ】

○○さんの意見をまとめると、・・・ということだと思えます。

(高学年用)

視点イ 根拠を明確にさせ、自分の考えをもたせる工夫

具体物・図・数・式・表・グラフ等を使って自分の考えを持たせる。自分の考えを発表する時は、発達段階に合わせ、「始めに」「次に」「だから」「つまり」等の思考の言葉を使って、根拠を明確にして表現させる。

視点ウ 練り上げの段階での発問の工夫

本時の学習内容をつかませるための話し合いのゴールに向けて、考えを比較し、よりよい考え方に気付かせるための発問を工夫する。

視点エ 話し合いの焦点化

協働解決につなげるために、子どもの数学的な考えの取り上げ方を決めておき、話し合いを焦点化していく。教師は進行役(ひろう・つなぐ・もどす)になる。(どういうこと?この後どう考えたと思う?○○くんの言いたいこと、分かる?もう一回隣の人に説明してごらん。等)